

コラム

みやちゃん と ご一緒体験記

Vol.48

男女の性差を考慮した病気の予防・医療とは

10月中旬、コロナ禍で面会がかなわなかった施設入居中の母の見舞いその他で長崎に行ってきました。幸運にも滞在中ずっと秋晴れ、頬をなでる風には夏の気配がなく、気持ちのいい天候でした。今回の帰省は3年ぶり、母と会うのは4年ぶり。2020年に帰省したもののコロナが深刻さをきわめていたため、特に都会からの移動者は立ち入り禁止だったのです。

あれから数年……現在、故郷（長崎）も現住地・浅草も観光地のため、マスクなしの外国人でにぎわっています。まだコロナは終わった（収束した）わけではありませんし、インフルエンザも流行しているために油断はできませんが、故郷への想いもあいまって「そんなに長い月日が流れたんだ」「長かったな～」と懐かしさを覚えた次第です。肝心の母（認知症）は、昨年秋に施設内でコロナに感染し、高齢のためにもしや！という思いはありましたが、とても元気な顔をみせてくれましたので嬉しい限り。

故郷から戻り、台東区内にある生涯学習センターで、10月22日、台東区立男女平等推進プラザ「はばたき21」区民学習活動支援事業対象講座「日本における女と男の性差を考慮した病気の予防と医療」に参加してきました。これは、“みやちゃん”こと宮原富士子さんが理事長を務めるHAP主催、台東区立男女平等推進プラザ共催の講座で、この日の講演者は、日本における性差医療のスペシャリスト・天野恵子先生でした。

女性の健康支援に力をいれるHAPは、性差医療についての講座や勉強会をよく開いており、この講座の数日後（10/27）も「薬剤師のための性差医療・性差医学・ジェンダードイノベーション」と題したオンライン講座を開催しています。

同じ病気に罹患し同じような治療をしても男と女が同じように回復するわけではありませんし、同じ薬をだされても違いは生じます。男性中心の医療の現場では明らかにされなかった微小血管狭心症、慢性疲労症候群、更年期障害、月経困難症といった疾患に苦しむ女性たちが、天野先生の診断を求めて訪れています。

性差医療の重要性について、みやちゃんはFBで次のように発信しています。

***** 2023-1-28 宮原富士子FB*****

**【女にとっての人生会議@薬剤師は専門家としてアドバイスできるのか
質問に対して、アフターフォローについて】**

昨日、経口中絶薬申請に向けての大きな前進がありました。

まもなく緊急避妊薬のOTC化も実現するでしょう。HPVワクチンの適正な普及も望まれます。生殖医療【不妊治療】の保険適用も始まり関連医薬品の使用上注意改訂もされ始めています。実践使用例と副作用報告からこの注意改訂も進んでいくということで適正な動きだと思います。避妊、緊急避妊、不妊治療、HPVワクチンの接種、妊娠、出生前診断、中絶、出産、産褥期、産後の仕事、SRHRの概念から考えても、女性には大切な場面が若い時から山積していて、まさにそれは人生会議の連続ともいえるのではないかと。歳を取ってから自分の生き様を考えるには、生まれてからその時に至るまでの、自己決定や哲学の中での自分自身への問答や 人に言えない苦しみさうゆうものがあつての人生会議。

であれば、そのプロセスの中で、女性が遭遇するところにおいて身近な相談者は必要かもしれない。こと「避妊、緊急避妊、不妊治療、妊娠、出生前診断、中絶、HPVワクチンの接種」多くが、医薬品が関与している分野である。薬剤師はそのことにどう対峙してゆくのか、生活習慣病の治療という概念とは全く違う、倫理やSRHRの概念を土台にした、アドバイス。どうとらえてゆくのか。さらに薬剤師業界はジェンダーギャップの低さが極めつけに存在する。声をあげたい女性の薬剤師、いや様々な人に言えない経験をした女性が医薬品の専門家として存在する意義は、非常に大きいのではないだろうか。一般市民の女性、女性のパートナー、家族への女の人生会議への支援。そんなことをもう一度考えてみるときがやってきたのではないだろうか。大きな動きのあつた1日。

***** 2023-10-28 宮原富士子FB*****

【性差の話@昔=2000年初頭頃C県で】

2001年から2008年 千葉県では堂本さんが知事をされていて=当時も珍しく女性知事=天野恵子先生も参戦し女性外来がたちあがった。女性の健康相談を保健所中心に研修研修と並行して立ち上げ、そののち堀江先生にもてつだってもらって男性の健康相談もたちあがった。その時の議会で 今でも 課題としてもよいような反論という意見が議会でも上がっていた。

知事は、「男女共同参画」について言及しながら「女性外来」を立ち上げるというのは 矛盾ではないか。とか。私たちに言わせれば笑止千万=今でいえ

ば OBNの発言なんだけど。まともに真剣に思っていたら男の人たちの人数の多さとかメジャー政党の圧力とかすごかったなあとも思い出します。OBNの人たちは、いかに自分たちが優遇された医療を受けてきたかに気づかないので当然かもしれないのですが、いま20年経って 今度は性差 性別 ジェンダー など様々な視点でも 同じようなことがおきているんだなとつくづく感じます。

メジャーの人たちは、自分たちが当たり前の世界にいることにあまり気づかないってことは このことに限らないだろうと。国の施策が、本当にその路線 経済にしてもですが なのは困ったものなのです。あんまり大きな変革が期待できないなら目の前のことで身の回りでいい生活圏をつくってゆくのもありだなあと。

1つは自分の住む地域のリアルの生活(食・寝・動・病気予防や治療・衛生・安全) とかと 1つはSNSやインターネット上での気の合う仲間との だべりんぐ。後者の中で同じような考え方をもつ人たちと集っている 話し合っているというのも心の安定なのかもなあと。

性差医療の勉強会は単に医療にあらず 生き方考え方の模索につながるかなあと昨日も思ったところでした。

~~~~~

加齢とともに見た目(外見)が変わるように、内臓も加齢とともに衰えます。薬を飲んでいるから大丈夫と思っ  
ていても、薬に対する代謝も鈍くなるという現実をうけいれることは大事です。

ご自身の体験も交えて話された講演の中でも、女性の場合、「加齢の指揮者は女性ホルモン！ すなわちエストロゲン」と力説される天野先生の言葉にドッキリした人は私だけではなかったようです。

女の身体で生き年齢を重ねる以上、しっかり現実を受け入れ、自分の人生の指揮者は自分でありたいですね。治療は医療の現場が担うものですが、症状や病気について正しく理解し、罹患しないための予防を自分ですることが大事なのは言うまでもありません。いつまでもやりたいことをやれる自分でいられるように、がんばりましょう！

※HAP <http://www.hap-fw.org/>